ことばのユニバーサルデザインに向けて

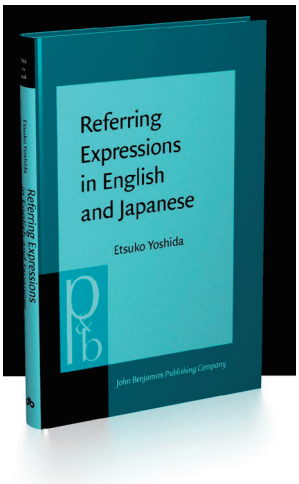
関連するSDGsの国際目標

人間文化学部　国際コミュニケーション学科　　教授　　吉田　悦子
研究分野　：言語学、談話分析、語用論
研究室ＨＰ：　http://yoshidalab.moo.jp

概要：言語活動の大部分を占める話しことばを研究対象として，対話や会話によるやりとりのデータに基づく文法・意味・談話の研究をしています。たとえば、初対面の2人が手探りで道案内をする対話場面と、旧知の仲間3人が雑談する会話場面とでは、ことば遣いも談話構造も異なります。日常の何気ない発話の連鎖を紐解きながら、語用論や相互行為言語学のアプローチを利用した分析をおこない、そこで起こっているインタラクションのしくみの一端を明らかにしていきます。

■言語学からのアプローチ

自然な話しことば、特に対話・談話データを利用したコミュニケーション研究は、文理融合により研究が発展してきました。私はこれまでに、自然発話データをもとにした文法（特に指示表現）および談話構造の分析と考察や、日本語と英語の対照言語学的研究を中心に行ってきました。近年は、多言語・多文化がかかわるワーク・プレイスにおけるコミュニケーションの課題を踏まえて、その解決に向けての支援につながるような言語研究を進めています。また、共通語としての英語や日本語の運用場面に注目して、非母語話者を含む職場のコミュニケーション上の問題解決や、ことばのユニバーサルデザインへの応用に向けて検討しています。



■職場の談話研究

近年、医療現場や介護施設などで、異なる職種や技能をもつ人々の間で生じる誤解の原因究明のために、実際のコミュニケーション活動を収録したデータに基づく研究が急速に進められています。とりわけ、日本語を母語としない外国人を雇用することで、職場が異文化接触場面となり、外国人就業者と雇用者間、また就業者間で生じるミスマッチやミスコミュニケーションの問題が議論され、その解決は喫緊の課題となっています。

異文化接触場面で生じうるコミュニケーション上の問題は、当事者同士ではすぐに見つけることが難しいものです。しかし、収録した談話データを丹念に分析することで、そこで起きている問題の原因究明や解決方法への手がかりを探る可能性が生まれてきます。



■外国人労働者支援へ

職場談話研究では、職場をフィールドとして収集した談話データの分析により、現場で起きている様々な発話理解を通して、「コミュニケーションを可視化する」ことを目指しています。外国人を受け入れる企業と連携して、研究成果を共有していけば、職場の関係者と共に具体的な支援の方法や内容を考えることが可能になります。さらに、情報共有が進めば、建設的な話し合いの機会をもつことが容易になり，相互理解の促進と業務効率化が図られて、双方の利益につながることが期待できるのではないでしょうか。

＜特許・共同研究等の状況＞
・2018-2022年度 JSPS 科学研究費（挑戦的(萌芽)）「ユニバーサルデザイン対応型作業マニュアルの作成と活用：外国人技能実習生と職場共生」（吉田悦子 代表）詳細はこちら：https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18K18506/